

古代兵法と古武道に於ける基本概念

The Fundamental Concepts in the Intelligence of the Old age Strategy and the Old Martial Arts

有賀正浩*

Masahiro ARUGA

Abstract

In this paper some fundamental and essential concepts which exist in the old age strategy and the old Japanese martial arts are described considering the contents in the two books of "Gorinnosyo" and "Sonshi". Here, "Gorinnosyo" is an old Japanese book of Musashi Miyamoto and "Sonshi" is an old Chinese strategic book of Sunzi. And the interrelationship between the fundamental concepts and the practical use of them is discussed and the concrete entrance doors to the practical methods of the fundamental concepts being in the two books that will be developed infinitely are described using the words in this two books that mean training or a kind of model analysis and simulation. Finally the conclusion and future works are described.

1. はじめに

筆者は長年理工系の研究を続けて来た。しかし何処までを理工系と言い、何処までを文系と言うかは厳密に区別出来るものではない。本論文では、説明する内容を考察する上で、先ず、一般的に言われている表現の理工系及び文系と言う表現からスタートしようと思う。本論文では、この理工系とか文系とかと言う表現からスタートするが、これは、本論文の内容を説明する為の仮の区分であり、狭小な限定的かつ確定的意味で使用されるものではない。特に本論文では、一般的に文系の文献と言われる古典の文献を考察し、そこから理工系の概念であるサイエンスを意味する概念を含めた諸概念を導く事とする。斯うする事により、仮りの区分的表現を超えたより本質的概念が存在し、この概念に基づいて基本的概念を導く事が出来る事と、その基本的概念が実用性を有する概念である事を説明する。以上の考察手順に沿って、本論文では、中国の古代兵法と日本の古武道に関する文献を対象として、内在する本質的基本概念の存在とその実用性に付いて考察し、基本概念の一つである情報概念と共に説明する。その為に対象と成る文献は、膨大な数に上る事は明らかであるが、一度にこれらの膨大な数の文献を全て扱う事は不可能である。と同時に、本質的概念を導く為には、これらの文献全てを一度に扱う事は反って妨げと成る。これは、第一に必要な作業は、本質的概念を導く事であり、この作業は深く内容を考察する事が基本と成る。この時1つか2つの文献を基礎としてこの作業を行う事が重要であり、徒に対象文献を増やす事は、同じ結果を求めて、増やした対象の数だけ倍した労力を掛ける事に成る。つまり、増やし

* 埼玉工業大学先端科学研究所客員教授

た文献数倍の労力を必要とするにも関わらず得られる結果は同じ本質的概念の把握に過ぎないからである。言い換えると、最初の目的からは不必要な作業分だけ妨害と成るのである。勿論、新たな基本概念を考察する為に新たな文献を考察する事が重要である事は言うまでも無い。この様な新たな文献を対象としての研究方向は今後の課題として進める事に成るが、本論文では、先ず1,2の古典的文献をベースに一つの基本概念的考察を進め、参考と成る文献をその都度考察に加える事とする。

本論文では、中国古代兵法と日本古武道の考察に於いて、2冊の書物「孫子」と「五輪の書」を考察対象の基本資料、基本書物とする事でこれらの文献から潜在する基本概念を導く事を始める。特に本論文では、これらの書物に関する文献考証学的問題は避け、現在古典的文献と見なされている現状を前提に、其の内容を検討する事とする。これは、これらの書物から先人が実用的実体を学んできた事をその基本的視点に取って考察する為である。言い換えると、先人が兵法、武道の修行の中でこれらの書物を学び研究して来た事実を踏まえ考察を進めると言う事である。勿論、この考察法は文献考証学的考察が不要と云う意味では無い。文献考証学的問題は本論文とは別の視点から検討し、別論文で説明する事とし、本論文では、先人の修行の事実を考察の前提とする事により、取り上げた2書を考察の対象とするのである。現在手にする事が出来るこれらの2書は、何百年の間、又現在に至るまで、多くの修行者が手にし、学び、研究し、実践して来た事実があるのである。さて、これらの基本2書を考察する事で筆者は、既に、情報の視点から幾つかの論文で兵法（基本書は古代中国の兵法書であるが、修行者の前提から一般に「兵法」として以降の説明を続ける。）と古武道（日本古武道として宮本武蔵の五輪の書を基本書としているが、兵法同様修行者の前提から一般に「古武道」と云う表現で説明を続ける。）の中に存在し、且つ表明されている諸概念を説明して来た。[1-8]

これらの諸論文の説明では、これら基本2書からその基本概念を導いて来た訳であるが、これらの2書のみから検討した訳では無く、参考出来る資料は参考にして導いて来たのである。特に、ナポレオン戦争の反省以降確立したクラウゼィッツの戦争論、即ち、近代兵法に考察の対象を広げ、基本概念の一つとして、システムの概念を抽出した。このシステム概念をベースにする事で、古代から近代に至るまでの兵法思想と古武道の基本思想が理解出来る事を示して来た。結果、システム概念に基づく事により、古武道の概念と古代から近代兵法までの概念の本質を明確化する事が出来るのである。本論文では、既に導出した基本概念の幾つかを更に深い視点から再確認する意味で、先ず基本システム概念を上述の基本2書から導く事が出来る事を示し、それは、所謂理系と呼ばれる概念である原理的概念の一つであり、その実用性に付いても検討を拡張して導く事が出来る事を示す。同様な導出法によって、情報概念を含めた幾つかの本質的概念を上述の基本2書から導出し、それらの諸概念の相互関係がどの様に組み立てられているのかの一端を明らかにする。

勿論、表示文言は重要な要素であるが、文言其のものと云うよりは書物の内容を考察する上で、基本2書「孫子」と「五輪の書」に関し、本論文の考察法として、現在も古武道の現実的稽古を基本とする修行の伝統の中に伝えられている考察法を含めた方法論を採用する事とする。[1-3]、[11]

言い換えると、資料は資料そのものの研究があり、現在伝わったものと原典とが、資料的に同じものであるか否かは正確には判らない。又、こうした現在残されたものが著者とされる人物そのものの残したものかも同様であるし、著者に付いての状況も然りである。しかし、本論文で考察する対象は、資料の考証的内容が本質的内容の全てを占める訳ではない。こうした検討は全ての古文書や資料に共通した

事であるが、そこでは、対象とする問題に関し、こうした残された資料の考察視点が重要な意味を持つのであり、本論文では、其の考察視点を置く土台をこれら基本2書をベースにした修行者の存在と修行の継続性を取る訳である。従って、本論文ではこれらの資料の文言を文言だけに留めた考察をする訳では無い。文言を本質的概念への扉と見なす考察を行う事により、文言の背後に古代から流れている本質的概念、思想及び実用の意味を含めた本質的情報概念を明らかにする事を目的とするので、修行の事実の中で使われているこうした資料を考察する事が十分意味ある事と成るのである。修行の事実と云う点から考察すれば、こうした残された資料の文言は、唯著者一人のみの思想と言うより、多くの修行者の経験や知恵が集約した形で継承表現された結果であると見なせるのである。従って、文言の扉を開く事でより本質に近着いた知恵を理解出来ると予測出来るのである。

2. 古武道と古代兵法に於けるシステム概念

先ず此处では古武道に於けるシステム概念を「五輪の書」を元に考察する。対応する記述を基に検討を進め、システム概念の捉え方、つまりシステム概念とは何であるかを考察するための方法論の説明から始める。当然、システム概念の意味を考察するに際し、情報と実用の概念が付随する。システム概念が何であるかに応じて実用とは何を意味するかが付随すべき情報に示される訳であるが、意味する所のこの情報が付随したシステム概念と実用が考察される場合、システム概念の本質を理解する為の方法論が同時に古武道の表現の中に潜在的に提示されているのである。つまり、古武道を学ぶ側からシステム概念を顕在化する為にはどう対処すべきかの方法論とそのシステム概念の実用性に付いて、より深く理解する道が同時に古武道表現の中に示されているのである。この事を以下に、先ず、古武道表現を考察する事で示し、この考察と同様な考察によって同義の状態が古代兵法の表現中にも内在している事を示す。そこで先ず情報概念をインテリジェンス（情報の質に関係）とインフォメーション（情報の量に関係）の両義を軸とする2次元の座標軸概念の関係を仮定して考察を進める事とし、システム概念の捉え方の例を「五輪の書」の「序の巻」から見てみる事とする。「五輪の書」は、先ず、「序の巻」で「五輪の書」を著すに至った簡単な理由が述べられている。簡単な叙述ではあるが「五輪の書」の全体像を著者の意向から理解する上で基本的で本質的な情報を提示している。本論文で考察する潜在的諸概念と実用の本質を捉えた説明である。「序の巻」の表現の一部を省略して例示すると、「兵法之道、二天一流と号し、数年鍛練之事、初而書物に顕さんと思、時寛永二十年十月上旬の比、九州肥後の地岩戸山に上り、天を拝し、観音を礼し、仏前にむかひ、生国播磨の武士新免武蔵守藤原の玄信。年もって六十。我若年の昔より兵法の道に心をかけ、・・・勝利を得ざるといふ事なし。其後国々に至り、・・・其程年十三より十八九迄の事也。我三十を超へて跡をおもひみるに、・・・天理をはなれざる故か、・・・をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の比也。其より以来は尋入べき道なくして光陰を送る。兵法の利にまかせて、諸芸諸能の道となせば、万事におゐて我に師匠なし。今此書を作るといへども、仏法儒道の古語をもちからず、軍記軍法の古きことをもちひず、此一流の見たて実の心を顕す事、天道と観世音を鏡として、十月十日之夜寅の一てんに筆をとつて書初るもの也。」と述べられている。此の記述は、後段の5つの巻、地水火風空の各巻で述べる事の本質を示し、各巻から得られる諸概念の潜在性を示唆しているものである。此处では、字面に捉われると一見矛盾した文言に遭遇する。例えば、「仏法儒道の古語をもちから

ず、軍記軍法の古きことをもちひず」と述べられているにもかかわらず、後の5巻の中では、それらの記述の中で当然古代からの基本的本質を記述する為、これらで用いられる古語を使用している。即判る例は、第5巻目の表題「空の巻」の「空」である。「空」自体が仏法用語である事は、周知の所である。こうした事の意味する所は、「序の巻」で説明している事は、字義通りの意味から潜在する概念を考察するのでは無く、「此一流の見たて実の心を顕す事」と述べられている様に、「実」を説明する視点と同じ土台に立って解釈をすすめ、潜在概念を導出する必要性を示すものである。これは、「五輪の書」に則り修行する事は、理解解釈法そのものを修行の一つとして身に付けて行く必要がある事を意味する。この意味で、矛盾すると見える視点を超えた視点から基本書、今は、「五輪の書」であるが、この「五輪の書」の持つ潜在的諸概念を顕在化させなければ、字面の視点からでは顕在化させる事は出来ない事を意味しているのである。又、ここで、「実」と言っている事は、真実の実を含む意味であり、システム概念とその実用性を伴う概念を含んだ本質としての実である。この「序の巻」に於けるこうした表現は、一見概略的表現に見えるが、その表現に内在する思想的構造は、上述の実を含んだ意味を全てに持つものであり、表現の背後に無限に深める事の出来る諸概念を持つものである。こうした諸概念が潜在的に実在する事は、例えば、「をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の比也。其より以来は尋入べき道なくして光陰を送る。兵法の利にまかせて、諸芸諸能の道となせば、万事におゐて我に師匠なし。」と述べている点や、前半の「をのづから兵法の道にあふ事、我五十歳の比也。其より以来は尋入べき道なくして光陰を送る。」等の表現の中に、内在する兵法の諸概念、諸理論の集合体を兵法の道と表現して、その道を得たとしている事から判るのである。道を得た後は、道と云う集合体の中に兵法の諸概念、諸理論が含まれている訳であるから、その中に存在しない異なる兵法の諸概念、諸理論を新たに求める所が無くなったと述べているのである。道を外れて兵法の諸概念、諸理論が存在するとすれば、其の事自身が兵法の諸概念、諸理論を自己否定する事に成り矛盾を来す事になるのである。これでは、道に至る修行を手引きする為の「五輪の書」の著述の意味を失う事と成る。つまり、「五輪の書」の示す「道」への手引きを理解し、道を得る事が修行（後述するが「五輪の書」では、稽古、鍛練と云う表現をしている。）であり、この事により、道に潜在する無限の兵法諸概念や諸理論を顕在化出来るのであり、道を外れる事こそが無限から外れた有限と制限を齎すものである事を示している。言い換えると、兵法諸概念や諸理論に限界があって学ぶものはこれ以上無いとか、兵法の有限な対象としての全ての兵法諸概念や諸理論を得てしまったと言っているのでは無い事を理解しなければ成らない。つまり、兵法諸概念や諸理論の集合体であり、汲めども尽きない井戸を手に入れたと言っているのである。だから、後半で「兵法の利にまかせて、諸芸諸能の道となせば、万事におゐて我に師匠なし。」と記述されるのである。即ち、道という井戸から汲み出せば、無限の兵法諸概念や諸理論を汲み出す事が出来るので、そのアナロジーから他の全ての分野の諸概念や諸理論も理解出来ると同時に応用出来ることと述べている。又各分野の諸概念、諸理論を汲み出す事が出来る訳であるから万事に師匠を持つ必要がある訳では無いと言う事も出来るのである。但し、師匠の必要は全く無いとか師匠を持つべきでは無いと云う意味では無い事は師匠である武蔵が弟子にテキストとしての「五輪の書」を著述した事から明らかである。即ち、真実の師匠はその道その道の本質的諸概念、諸理論であると云う事を示しているのである。さて、兵法の諸概念の一つであるシステム概念はこの「道」という井戸から導く事が出来るのである。そこで先ず、古武道の考察からシステム概念を導出する事を始め、同様な導出が古代兵法の考察からも得られる事をプロセス

とその意味を示し、以下に説明する。[1-11]

古武道の考察からシステム概念を検討する為、以下の例示を考察する。古武道の例示として、前述では宮本武蔵の「五輪の書」を考察して来た。此处でも同様に基本書として宮本武蔵の「五輪の書」を考察する。但し、武蔵は「五輪の書」の中では、一貫して自らの「道」に付いて「古武道、剣道、剣術等」の表現を用いず、「兵法」と云う表現を用いている。此处では、これに付いての詳細は省くが、この表現はシステム概念と密接に関連しているのである。さて、武蔵は太刀を先ず概念確立の入り口であるとし、「五輪の書」地の巻の「兵法二つの字の利を知る事」の条で「・・・然れども太刀よりして兵法と云う事道理也。太刀の徳よりして世を納、身を納る事なれば、太刀は兵法のおこる所也。・・・武士の法を残らず兵法と云所也。・・・よくみがく事肝要也。」と書いている。この条の中の表現は、正しく基本概念のアナロジー的拡張表現と成っている。つまり、現代の理工学的表現を用いると、武蔵が示す兵法の体系が、一つのシステムと見なし得るものである事を意味している。兵法と云う概念は、システム概念と云う基本概念を内在した概念として提示されているのである。「五輪の書」は、太刀に対する体系が一つのシステム概念（武蔵はこれを小の兵法と言っている。）であり、その基本概念の発展的アナロジーであるシステム概念の拡張が兵法システムの基本概念の一つである事を示しているのである。この概念構造を現代の情報システムの言葉を借りて例えると、コンピュータの正式名称であるコンピュータシステムがそれを包括しているネットワークシステムのサブシステムである構造と似た構造であると言えよう。[1-10]

又、武蔵はこの条の初めの所で、世間一般は「太刀を振得たるもの」を特に「兵法者」と呼んでいるが、これには相当の理由があると述べている。つまり世間では「武芸の道に、弓を能射れば射手と云、鉄砲を得たるものは鉄砲うちと云。鐘をつかひ得ては鐘つかひといひ、長刀をおぼへては長刀つかひといふ。然におるては、太刀の道を覚へたるものを太刀つかひ、脇差つかひといはん事也。・・・」と言ひ、「太刀を振得たるもの」は、「太刀つかひ、脇差つかひ」と言うべきなのに「兵法者」と言う事は何故なのかと問いかけている。この問いの解答が、上述の「太刀の徳よりして世を納、身を納る事なれば、太刀は兵法のおこる所也。」である訳である。此处では、システムとしての「太刀つかひ、脇差つかひ」の体系概念がアナロジー的拡張を以って、世間一般に「兵法者」と理解されていると説明しているのである。世間は、漠然とそう思っているので、「兵法者」と言うのであるが、漠然とした点の中にも世間一般は直感的にこのシステム概念の適用を行っていると説明しているのである。更にこの条で、武蔵は、直感的システム概念を「兵法」の基本概念として明文化し、武士の身に付けるべき法を示すと説明している。この身に付けるべき法を全て「兵法」と考えると云う訳である。此处で、身に付けるべき法という表現はシステム概念のアナロジー的拡張を意味している事がわかる。本論文では、後の章で少し取り扱うが、これらの身に付けるべき法は、「五輪の書」全般に渡って、個々の事例且つ具体的事例と共に説明されている事を考慮し、その背後にある抽象概念を導出する。特に、「五輪の書」では、それらの事例が全て一定の形と強く結び付いて説明されている。つまり、「形」の概念がシステム概念と一対の概念として働き、システム概念を抽象化して理解出来る様に説明されているのである。此の「形」の概念が又「兵法」即ち「道」から導出される基本概念の一つとして作用する。所で、上述の基本概念としてのシステム概念は古武道の基本書「五輪の書」を考察する中で導出して来た概念であるが、この基本概念としてのシステム概念は古代兵法に潜在する概念でもある事を基本書「孫子」を考察する事から導

出出来る事を以下に示す。

システム概念の導出に於いて「孫子」の冒頭第一篇、計篇が示唆している内容を考察するとシステム概念が潜在している事が明らかに成る。この計篇では、「孫子曰、兵者国之大事、生死之地、存亡之道、不可不察也、故経之以五事、校之以計、而索其情、一曰道、二曰天、三曰地、四曰将、五曰法、道者令民与上同意也、故可以与之死、可以与之生、而不畏危、天者陰陽寒暑時制也、地者遠近險易広狭生死也、将者智信仁勇嚴也、法者曲制官道主用也、凡此五者、将莫不聞、知之者勝、不知者不勝、故校之以計、而索其情、・・・」と述べられている。此の篇では、5種類の比較場面を設定した記述が為されている。その各々の優劣を情報のコミュニケーションの立場から比較し勝敗の推定を示す訳である。つまり、コミュニケーションの視点で情報の流れが考察されており、情報システムとしてのシステム概念が存在するのである。又、此処で述べられている内容を考察すると、情報システムと云う点で明らかであるばかりでなく、本篇では、先ず、「一曰道、二曰天、三曰地、四曰将、五曰法」の5種類の状況分類が存在しており、この分類は、5つのパターン、即ち、5つの対象である単位を示している。其の上で、これらの単位が相互に組み合わせられて一つの結果を導く事を説明している。つまりこの単位相互の組み合わせによる一つのシステム概念を示しているのである。又、本篇の対象と成る5つの単位に関する説明である「道者令民与上同意也、故可以与之死、可以与之生、而不畏危、天者陰陽寒暑時制也、地者遠近險易広狭生死也、将者智信仁勇嚴也、法者曲制官道主用也、」を考慮すれば、その抽象概念を前提に、「凡此五者、将莫不聞、知之者勝、不知者不勝、故校之以計、而索其情、・・・」と示されている点から、特に、5つの単位システムで示されている5つの単位の構造的組み合わせの視点でシステムを考察する事が出来、結果、現代の静的システムの概念を導出出来る事が判る。更に、情報システムの流れの中でこのシステムを考察すると現代の動的システムが導けるのである。言い換えると、古代兵法の中には動的システムと静的システムの基本概念が存在していると言える。前述の古武道での考察では、基本概念としてシステム概念が存在する事を「五輪の書」を基本書として導出したが、「五輪の書」では、特に、動的システムと静的システムと言う表現は用いなかった。しかし、これらに関しては、「孫子」を基本書として導いた結果と同様な結果が得られるのである。此の事は、「孫子」では全篇を通じて重層的に記述されているが、「五輪の書」では、特に実用の意味を説明する条が存在し、実用の意味を理解する上での鍛練、稽古の本質の説明を理解する為の方法論の視点から述べられている。即ち、本章では詳細は省くが、システム概念には必ず基本概念の一つである「形」の概念が結びついているのであり、上述の「孫子」の篇に於ける5つのパターンは、静的システムの意味の「形」概念と情報システムの視点からの動的システムの意味を持つ「形」概念が結び付いているのであり、古武道に於ける基本概念もこれらの「形」の基本概念が存在し、実用概念と結び付いているのである。「孫子」では、記述そのものから実用性を導出出来、「五輪の書」では、鍛練、稽古の概念である修行法から導出出来るのである。又、それら実用性は、抽象概念としての「形」の概念と結び付いた形で説明されているのである。[1-9]

3. 基本概念としての実用性

前章迄で、古代兵法や古武道に潜在する基本概念の一つとしてシステム概念を説明して来た。此のシステム概念が、潜在する他の基本概念とどのような構造的組み合わせにあるかを本章で考察する事とする。

基本概念は複数存在するが、本章では、基本概念としての「実用性」の概念との組み合わせを検討する事とする。この「実用性」の概念は、基本書「五輪の書」の「地の巻」の序文で「五輪の書」の学修法を通じて説明されている。「地の巻」は序文を含めて全条文に於いて、学修法の修得に付いてその方向と実用性の意義を示している。例えば「兵法の道と云事」の条で「漢土和朝までも、此道をおこなふ者を兵法の達者といひ伝へたり。武士として此法を学ずと云事あるべからず。近代兵法者と云て世を渡るもの、是は剣術一通の事也。……剣術一ぺんの利までには、剣術もしりがたし。勿論兵の法には叶べからず。世の中をみるに、……一ッには農の道。……二ッにはあきないの道。……三ッには士の武士におゐては、……四ッには工の道。……是士農工商四ッの道也。……兵法を大工の道にたとへて言いあらはす也。……兵の法をまなばんとおもは、此書を思案して、師ははり弟子はいと、なつて、たへず稽古有べき事也。」と述べ、師匠が弟子に指し示すものとして、学修する上での方法論を理解すべき事からスタートしている。つまり、諸芸諸能の道に至る事は、学修者自身が踏み入らなければ成らない事理解の必要性である。師匠が弟子を持ち上げて中に入れる事は出来ないのである。弟子自身が踏み入らなければならず、踏み入るべき方法論を先ず身につけなければならない。又、この学修法には古代兵法、古武道の基本概念である「実用性」の概念がその基本要素として存在する事を説明している。又、「形」の概念との関わりを通して学修法を説明する例として、「水の巻」の「兵法の身なりの事」の条を考察すると、「身のかゝり、……くさびをしむると云おしへあり。」と兵法に於ける姿形の説明を通し、修行法に於ける目標点を「惣而兵法の身におゐて、常の身を兵法の身とし、兵法の身をつねの身とする事肝要也。能々吟味すべし。」の様に述べている。つまり、「常の身を兵法の身とし、兵法の身をつねの身とする」様に学修する必要があると示しているのである。言い換えると、常の身及び兵法の身と言う表現で道（古代兵法、古武道の本質）に潜在する基本的な諸概念を顕在的に理解し自由に応用出来る様に成る事を目標にすべきであると説明しており、弟子自身が兵法の道に入って自らの「身」を通して「道」に潜在する諸概念を顕在化させる必要がある事を説明している。この自らの「身」を通して「道」に潜在する諸概念を顕在化する事は「道」に潜在する基本概念の応用そのものであり、且つ、「常の身=兵法の身」に成っている点を考慮すれば、「実用性」そのものを意味する事と成る。こうした例証は「五輪の書」の各巻に幾つも述べられている所である。所で、前述の「序の巻」で「兵法の利にまかせて、諸芸諸能の道となせば、万事におゐて我に師匠なし。」と述べられている様に、兵法の道を得る事から、諸芸諸能に於いてその道を得る事が出来ると云う事は、応用そのものの、実用そのものの能力を身に着ける事が出来る事を示すものである。事実、著者である武蔵自身が画いたと言われる絵画一つ見ても絵師の域入ったものである。但し、此処で注意しなければならない事は、兵法の道を得た事がそのまま絵画の技術を身に着けた事にはなら無いと云う事である。絵画技術を何も学習せずに、絵師の域にある絵画が描けると誤解してはならない。この様に短絡的に解釈する事が、此処で言っている事では無い。昔から言われる事に「劍禪一如」と云う事があるが、この言葉も同様に注意すべき事である。短絡的に解釈するのでは無く、本質的理解に基づき絵画技術の初段階から自ら学ぶ方法論に、古武道の「道」を得た学修の方法論が繋がると云う事である。つまり、絵画に関する「道」は、兵法の「道」のアナロジー的方法論として理解すれば、自ずと修得出来る事に成ると言っているのである。「道」の意味を理解すれば、師匠の存在とは、其々の分野に於ける「道」の存在方向を指し示し、弟子が自ら得る為の指標である先輩の存在に過ぎず、その先輩が「道」そのものを授けてくれる「道」の授

与者である訳では無いのであるから、この様な諸芸諸能に関する前述の条に於ける表現は正しい表現である事が判る。結果、古武道に於ける修行法は、実用そのものの概念を包含しており、実用を伴った「道」を得るという概念に集約された方法論であると言えるのである。此の事から、例えば絵画の「道」に於いても十分実用のレベルを保つ事が出来るのである。又、この実用性の概念に付いての具体的な表現として、上述の「地の巻」の序文で「武士の兵法をおこなふ道は、何事におゐても人にすぐる、所を本とし、或は一身の切合にかち、或は数人の戦に勝、主君の為、我身の為、名をあげ身をたてんと思ふ。是兵法の徳をもつてなり。又世の中に、兵法の道をならひても、実の時の役にはたつまじきとおもふ心あるべし。其儀におゐては、何時にても役にたつやうに稽古し、万事に至り役にたつやうにおしゆる事、是兵法の実の道也。」と述べられている事に明示されている。つまり、此处で明示している「其儀におゐては、何時にても役にたつやうに稽古し、万事に至り役にたつやうにおしゆる事、」の記述で示される様に、「実用性」の概念は其の修行法と密接に結びついており、修行法によって「実用性」の具現化が出来ることと述べられているのである。この意味は、近年巷で言われている社会ですぐ役立つ教育をすると言う意味の実用では無い。その様な実用は社会が変われば直ぐ役に立たなくなり、実用の意味を失う。然も近年の社会変化は目まぐるしいものがある。この例が情報関連の社会である。数年前の情報関連のアプリケーションは使われなくなっている現状がある。又、学校教育に於いてもしばしば見聞きする例がある。数学教育に於いて学ぶ側の学生ですら、軽薄な意味での言動に閉じ込められて、大学迄で学ぶ数学に対し、「実社会では役に立たない。」とか「実社会には必要が無い。」とか言う文言がある事である。これらの例は、この「地の巻」冒頭の説明があてはまる事例である。数学が現代社会の役に立つとか立たないとかのレベルで論ずることは、本質を理解していないと云うべきである。数学で言えば、社会が変化してもその時その時の社会の要請をカバー出来る数学の実用性を理解する事である。古武道に於ける「実用性」とは、数学の例では、その必要性和理解を前提として学生に学びを体験させる状況と同等である。つまり、本質的な実用性を具現化出来る方法論が重要なのである。この方法論を理解すべきであり、理解出来る事を知る事が、古武道に於いて説明される修行法の本質である。

この修行法が「五輪の書」全体に渡って、潜在的且つ基本的概念の理解と共に述べられている。又、軽薄な実用の可否を主張する事が、「道」そのものから大きく逸れた誤りである事が示されている。即ち、前述の数学の例から現代風に言えば、最近言われている様な「実用例で易しく教える」の類の事では無く、本質的に役立つ学修法を理解して行く事が必要であると云う事である。学生には、数学そのものを教えるだけでは無く、数学の学修法を理解させる事であると言える。古武道に於いて上述して来た内容は、古代兵法の基本概念に於いても同様である。以下に「孫子」を考察し、その意味を示す。そこでは、一言で言うと「実用的展開が無限に出来る」と言う事を述べているのである。例えば、謀攻篇の第一章の有名な句、「孫子曰、凡用兵之法、全國為上、破國次之、全軍為上、破軍次之、全旅為上、破旅次之、全卒為上、破卒次之、全伍為上、破伍次之、是故百戰百勝、非善之善者也、不戰而屈人之兵、善之善者也。」等は上記の「実用的展開が無限に出来る」の意味を包含した表現である。一見すると、最上の状態とは何か漠然と判る気がするが、具体的にどの様にすれば、最上の状態に成るのか、或いは、最上の状態にする事が出来るのかは、この表現だけからは判らない。そもそも「不戰而屈人之兵、善之善者也。」と言い、最上の状態とは「不戰而屈人之兵」である状態と述べられているが、具体的にはどの様な状態と成る事か、又、具体的にどうすればその状態に成るのかはこれだけでは判然とし無い。しかし、「孫子」

では全篇の構成で各篇の内容とも重層する表現が為されているので、他の篇とも相互に関連するのが当然であり、そうした相互の関連を踏まえた上で表現構成上この篇に集約的に述べられているものと理解出来るのである。つまり、他の篇との関連で上記の問いに対する答えが得られる。特にこの「善之善者」は、最上の者として表現され、これは、古代兵法の基本概念の一つとして存在する情報概念の実用性の現れである情報そのものの送受に明確に関連する事象であり、実用性そのものの意味を持つ篇、「用間篇」と重層的構成と成っている。特に、この「用間篇」の第三章では、「故三軍之事、莫親於間、賞莫密於間、非聖智不能用間、非仁義不能使間、非微妙不能得間之實、微哉微哉、無所不用間也、・・・」と述べられており、この中の語句である聖智、仁義、微妙、微哉等の本質に繋がる実用性の具体的様態が示されるのである。つまり、「善之善者」の姿の一つは、聖智、仁義、微妙、微哉等で表現された実体であり、それらの実体の共有である。又、これらを共有する為の具体的方法論の一つが「用間」なのである。更に「微哉微哉」と述べている様に、実用性に於いて無限の展開を示唆しているのである。此の事は、他の篇、他の章にも視点を変えた表現が為されている。例えば、「虚實篇」の第二章では「出其所不趨、趨其所不意、・・・、攻而必取者、攻其所不守也、・・・、故善攻者、敵不知其所守、善守者、敵不知其所攻、微乎微乎、至於無形、神乎神乎、至於無声、故能為敵之司命」と述べられており、此処での微、無形、神、無声等は全て上記の聖智、仁義、微妙、微哉等と同様な意味を持ち、重層的な意味と成っている。又、同「虚實篇」の第六章では、「故形兵之極、至於無形、無形、則深間不能窺、智者不能謀、因形而錯勝於衆、衆不能知、人皆知我所以勝之形、而莫知吾所以制勝之形、故其戰勝不復、而応形於無窮」と述べられており、極、無形、無窮等の表現により、同様の重層的意味を表している。つまり、古代兵法に於いても、古武道の「道」と同様な視点から、「聖智、仁義、微妙、微哉、無形、無声、無窮、神乎、極、」等の表現で内在する基本概念を実用性と一体のものとして示しているのである。これらの基本諸概念は「孫子」全体の各篇、各章で、又、「五輪の書」全体の各巻、各条でフラクタル的構造による説明が為されており、その結果齎される無限の実用的展開法を、これら基本2書の全体的学修により、自ずから修得する事ができる事が判り、同時にその方法論の修得も又可能である事が理解されるのである。さて、前述の説明より、「道」から基本概念が導出され、実用性の概念と強く結び付いている事が判り、其の結果無限の実用的展開が可能と成り、其の方法論の修得も可能である事が判った。其処で、この可能性を実現する為の具体的学修法の入口は何処であるかが極めて重要に成る訳であるが、実際的手法として「五輪の書」では「稽古」という一つの入口が提示され、「孫子」では、「廟算、多算」と云う一つの入口が提示されている。つまり、基本2書に提示された文言を鏡として稽古(含；トレーニングの意味)或いは廟算、多算(含；モデル解析とシミュレーションの意味)から「道、神、極」等の次元に至り、無限の実用性が得られるのである。[1-11]

4. 結果と今後の課題

本論文で、情報の本質に関連した日本古武道や中国古代兵法の示す基本概念の存在を示した。又この基本概念は実用性と密接に結び付いている事も説明した。「五輪の書」及び「孫子」の全体的記述では、こうした基本概念が重層的に説明されており、各巻、各条、各篇、各章が互いにフラクタル構造で説明されている点も示した。斯うした構造の下に基本概念が潜在している事を前提に、実用性の無限の拡張

展開に繋げる為の具体的方法論とその入り口が「稽古」及び「多算」、「廟算」である事、又これらの表現は、トレーニング及びモデル解析とシミュレーションの概念を含んだ表現である事を示した。今後の課題としては、「稽古」及び「多算」、「廟算」のプロセスをより厳密に検討し、現代の理工学的表現を導出出来る部分に付いては導出し、その最初から実用の無限の拡張展開を具体的に検討する事である。更に、「道」、或いは、「聖、仁、微、無、神、極」等の意味する次元の体現プロセスを物理的システム体系との関連の下で検討し、その実用性の具体的意味を考察する事である。

5. 謝辞

本論文に対し発表の場を提供頂けた事、日頃お世話を頂いて来た事、又現在もお世話頂いている事に対し、本学の故松川文豪前理事長及び松川聖業現理事長、更に同様な発表の場の提供と日頃研究会でお世話頂いている本学の土山泰弘図書館長に深謝申し上げる次第である。尚、本研究の一部は、JSPS科研費基盤研究C課題番号26330317の助成により行われたものであり、ここに謝辞を付す次第である。

6. 参考文献

- [1] 宮本武蔵著、神子侃訳：「五輪の書」、徳間書房、1963年8月
- [2] 大橋武夫著：「クラウゼイツ兵法」、マネジメント社、1980年4月
- [3] 孫子著、金谷治訳：「孫子」、岩波書店、1963年9月
- [4] 有賀正浩：古武道を考慮した兵法とシステム、第4回21世紀連合シンポジウム—科学技術と人間—論文集、pp、17-18、2005年11月
- [5] 有賀正浩：古武道と兵法に於ける偶然性と必然性、第5回21世紀連合シンポジウム—科学技術と人間—論文集、pp.113-116、2006年11月
- [6] 有賀正浩：兵法に於ける情報と古武道、第1回21世紀科学と人間シンポジウム論文誌（第1巻）、pp.47-52、2008年3月
- [7] 有賀正浩：古武道及び兵法に於けるコミュニケーションシステムと情報、第1回3学会共催大会（21世紀科学と人間シンポジウム、ファジィワークショップ、日本人間工学システム大会）第2回21世紀科学と人間シンポジウム論文誌（第2巻）、pp.12-17、2009年3月
- [8] 有賀正浩：兵法と古武道に於ける情報のシステム概念とその効果、第3回21世紀科学と人間シンポジウム論文誌（第3巻）、pp.44-50、2010年3月
- [9] 有賀正浩：古代兵法と古武道に於ける原理と実用の相互関係、第4回21世紀科学と人間シンポジウム論文誌（第4巻）、pp.44-50、2011年3月
- [10] 有賀正浩、加藤修一著「情報処理概論」東海大学出版会（1991）
- [11] フランソワ・ヴィゴ＝ルシヨン著、瀧川好庸訳：「ナポレオン戦線従軍記」、中央公論社、1984年6月（4版；初版1982年1月）